

第26回東京都中学校美術教育研究大会
第8・9・10ブロック北多摩大会

大会報告集

人間力をはぐくむ美術教育
～いま、求められる創造性～

豊かな「かかわり」を生み出す美術の授業



平成21年1月16日(金)

府中市美術館／府中市立浅間中学校

大会報告集目次

第26回都中美大会アルバム	(北多摩地区中学校美術展)			1
	(府中市美術館 ～研究授業風景Ⅰ～)			2
	(浅間中学校 ～研究授業風景Ⅱ～)			3
	(浅間中学校にて ～分科会・全体会の風景～)			4
大会要項と内容				5
基調提案	大会研究局長	大澤	晃	9
記念講演	東京藝術大学准教授	布施	英利 先生	12
研究授業と研究協議会の記録				
研究授業1	牛島憲之の作品を味わう (常設展示の鑑賞)			16
	府中市立府中第三中学校	遠藤	真木子	
	府中市美術館学芸員	武居	利史	
研究授業2	ビエンナーレ作品鑑賞 (企画展示)			19
	東大和市立第二中学校	未至	磨明弘	
	府中市美術館学芸員	成相	肇	
研究授業3	ビエンナーレ作家との協働による授業 「352人の小さなノート」			22
	府中市立府中第八中学校	中川	園子	
	府中ビエンナーレ出品作家	原	高史	
	府中市美術館学芸員	神山	亮子	
研究授業4	小学生と中学生が共同で生み出す授業 (新聞紙を使って)			26
	東久留米市立東中学校	藤井	義法	
	武蔵野市立第三中学校	三浦	悦子	
	武蔵野市立第六中学校	市野	美香	
	府中市立若松小学校	大杉	健	
研究授業5	モノを生み出す人の心 木から小刀でつくる ～町おこしグッズ			28
	西東京市立田無第四中学校	木原	美恵	
研究授業6	自分を取りまく世界「事象と自分との距離」			31
	国分寺市立第五中学校	北澤	昭俊	
研究全体会議	文部科学省初等中等教育局教育課程課 教科調査官 (国立教育政策研究所教育課程研究センター 教育課程調査官)			
		村上	尚徳 先生	34
大会運営組織一覧				37

第26回都中美大会アルバム



北多摩地区中学校美術展



府中市美術館 ～研究授業風景Ⅰ～



研究授業1 牛島憲之の作品を味わう



研究授業2 ビエンナーレ作品鑑賞



研究授業3 352人の小さなノート

浅間中学校 ～研究授業風景Ⅱ～

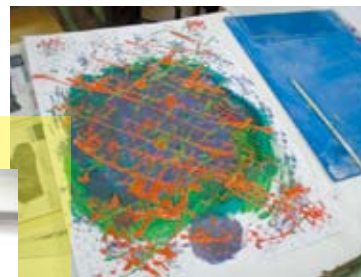
研究授業4 小学生と中学生が共同で生み出す授業



研究授業5 モノを生み出す人の心



浅間中学校にて



研究授業6 自分を取りまく世界「事象と自分の距離」



分科会



～分科会・全体会の風景～

全体会



一 大会要項と内容 一

(1) テーマ 人間力をはぐくむ美術教育～いま、求められる創造性～
豊かな「かかわり」を生み出す美術の授業

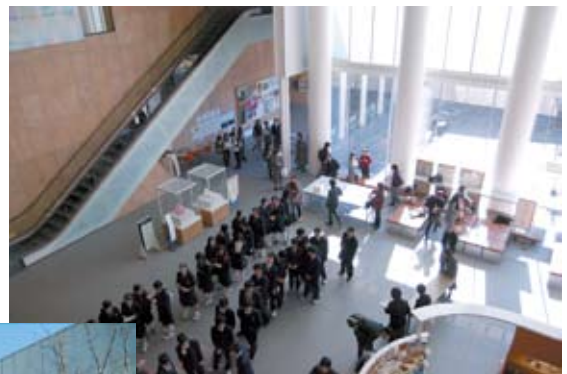
(2) 開催日 平成21年1月16日(金)

(3) 会場 府中市立浅間中学校
府中市浅間町1-1
府中市美術館
府中市浅間町1-3



(4) 主催 東京都中学校美術教育研究会
会長 牧井 直文 (中野区立中野富士見中学校長)

(5) 後援 東京都教育委員会
立川市教育委員会
武蔵野市教育委員会
三鷹市教育委員会
府中市教育委員会
昭島市教育委員会
調布市教育委員会
小金井市教育委員会
小平市教育委員会
東村山市教育委員会
国分寺市教育委員会
国立市教育委員会
狛江市教育委員会
東大和市教育委員会
清瀬市教育委員会
東久留米市教育委員会
武蔵村山市教育委員会
西東京市教育委員会
東京都中学校長会
府中市中学校長会



東京都中学校教育研究会
府中市小・中学校教育研究会 図画工作・美術部会

(6) 時 程

	10:00	11:00	12:00	13:30	14:30	15:20	16:00	17:00	
受付			研究授業 1～3	展示作品鑑賞	昼食	研究授業 4～6	分科会 1～6	研究講評 全体会	記念講演
	府中市美術館			移動	府中市立浅間中学校				

(7) 研究授業 1～3 11:00 ～ 11:50

場所 府中市美術館



1 牛島憲之の作品を味わう（常設展示の鑑賞）

発表者

府中市立府中第三中学校

教諭 遠藤真木子

府中市美術館

学芸員 武居 利史



2 ビエンナーレ作品の鑑賞（企画展示）

発表者 東大和市立第二中学校 教諭 未至磨明弘

府中市美術館 学芸員 成相 肇



3 ビエンナーレ出品作家との協働による授業「352人の小さなノート」

発表者 府中市立府中第八中学校 教諭 中川 園子
府中ビエンナーレ出品作家 原 高史
府中市美術館 学芸員 神山 亮子



(8) 研究授業 4～6 13:30 ～ 14:20

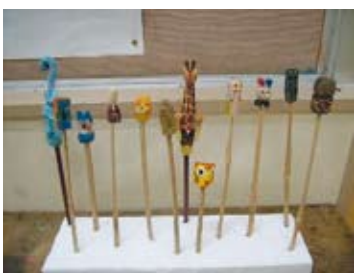
場所 浅間中学校

4 小学生と中学生が共同で生み出す授業（新聞紙を使って）



発表者 東久留米市立東中学校 教諭 藤井 義法
武蔵野市立第三中学校 教諭 三浦 悦子
武蔵野市立第六中学校 教諭 市野 美香
府中市立若松小学校 教諭 大杉 健

5 モノを生み出す人の心 木から小刀でつくる ～町おこしグッズ



発表者
西東京市立田無第四中学校
教諭 木原 美恵

6 自分を取りまく世界「事象と自分の距離」

発表者 国分寺市立第五中学校 教諭 北澤 昭俊



(9) 分科会 1～6 14:30 ～ 15:10

分科会 1	鑑賞 1	常設展示の鑑賞から	助言者 東京都教職員研修センター	教授	松井 一雄 先生	【視聴覚室】
分科会 2	鑑賞 2	ビエンナーレの作品鑑賞から	助言者 武蔵野美術大学	教授	三澤 一実 先生	【金工室】
分科会 3	鑑賞 3	「ビエンナーレ作家とともに」	助言者 東京都教育庁指導部 義務教育特別支援教育指導課	指導主事	松永かおり 先生	【図書室】
分科会 4	表現 1	～人とのかかわり	助言者 東京都教職員研修センター	教授	岡本 昌己 先生	【木工室】
分科会 5	表現 2	～モノとのかかわり	助言者 山梨県教育庁義務教育課	指導主事	鷹野 晃 先生	【第1美術室】
分科会 6	表現 3	～場（環境）とのかかわり	助言者 渋谷区教育委員会	指導主事	横山 圭介 先生	【第2美術室】



(10) 全体会・講演 15:20 ～ 17:00 場所 浅間中学校武道場

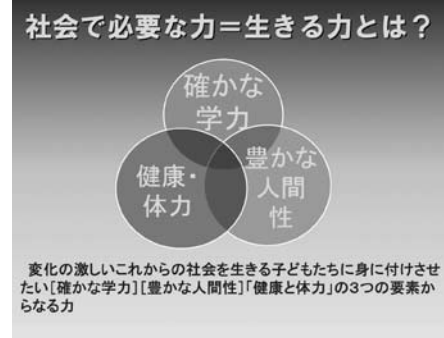
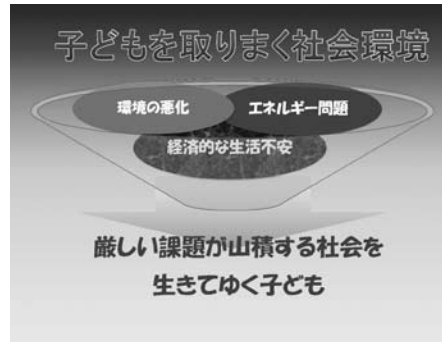
- ① 開会の言葉
- ② 主催者挨拶 東京都中学校美術教育研究会会長
中野区立中野富士見中学校長 牧井 直文
- ③ 実行委員長挨拶 大会実行委員長 府中市立府中第五中学校長 中村 一哉
- ④ 来賓祝辞 府中市教育委員会教育長 新海 功 先生
東京都教育庁指導部義務教育特別支援教育指導課 指導主事 松永かおり 先生
- ⑤ 来賓紹介
- ⑥ 基調提案 大会研究局長 国分寺市立第一中学校 教諭 大澤 晃
- ⑦ 講評 文部科学省初等中等教育局教育課程課 教科調査官 (国立教育政策研究所教育課程研究センター 教育課程調査官) 村上 尚徳 先生
- ⑧ 記念講演 「美を自然から学ぶ」
東京藝術大学 准教授 布施 英利 先生
- ⑨ 謝辞 大会副実行委員長 西東京市立ひばりが丘中学校長 大野 雅生
- ⑩ 次回大会実行委員長挨拶 葛飾区立上平井中学校長 殿村 靖廣
- ⑪ 閉会の言葉

大会テーマ 人間力をはぐくむ美術教育 —いま、求められる創造性— 豊かな「かかわり」を生み出す美術の授業

基 調 提 案

大会研究局長 国分寺市立第一中学校
大澤 晃

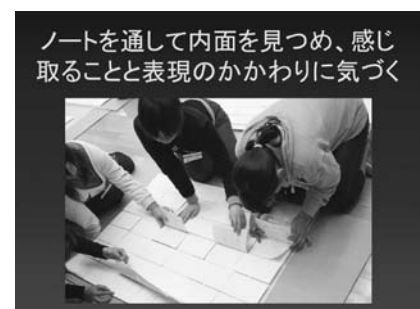
今、子どもたちを取りまく社会環境は、再生困難な森林破壊、海洋にまで広がる環境汚染やエネルギー問題、凶悪化する犯罪の増大、地道に働いても将来が不安な経済の先行きなど、厳しい課題が山積している。こ



れはやがて社会人となる子どもたちにとっても大きな問題になることは必至である。現在の社会では、加速的な社会変革の波が次々に押し寄せ、常識が瞬く間に変わってしまう。もはや先のことは容易に予測がつかない状況になっている。しかし、子どもたちはそうした中でも創造的にたくましく生きる力を身に付け、自分の人生を切り開いていかななくてはならない。新学習指導要領においてそうした背景を踏まえながらしっかりと自らの人生を築いてゆくために学習する力、それを生かす力をより一層重視し、学習によって自らを成長させる資質を育むことを明確に打ち出している。

さて、人は環境で育つ。豊かな教育環境で育った子どもは、自ら学ぶ意欲をもって、学習する力が育つといわれる。とりわけ小学校、中学校の時期には地域の環境と深いかかわりを持ち、成長する機会が多い。この人格形成の時期における体験、経験こそが将来の基盤になる。この大切な時期を子どもたちがいかに過ごし、社会に出る前にしっかりとした基礎的な学習を行うかが重要である。そこで、本大会では、子どもが成長し、社会的に自立していく過程を教科教育という視点からとらえ、「人間力を育む美術教育—いま、求められる創造性—」を大会テーマとして設定した。また、サブテーマの豊かな「かかわり」は、美術の授業を通して学習できる内容を明らかにするとともに様々な題材を開発し魅力ある授業を展開するというねらいをもっている。

ところで、学習の大きな目的が自己の成長にあると考えるならば、とりわけ中学校の年代は最も大きな節目の時である。子どもから大人に向かって肉体的にも成長し、知的好奇心が高まり、同時に豊かな感性が伸びる大切な時期である。この時にこそ周囲を取りまく人や環境と豊かなかかわりを持ち、自己を成長させ、社会で生きるための様々な知恵を吸収し身に付ける必要がある。本大会では、そうした視点で、子どもとその周りの豊かなかかわりに注目し、研究することとした。



また、本大会では府中市美術館のご協力を得て、同時期に開催される企画展に参加される作家の方々にもご協力を願い、子どもたちの新しい美術、芸術の芽を育てていこうとする試みにも取り組もうと

考えた。最近の美術館の活動では、既成の評価が定まった作品や作家を扱うだけでなく、これから創出する新しい美術・芸術に対して、学芸員が積極的に発表の機会を与え、美術館が価値を創成する起点となる役割を担うという活動も行っている。本大会ではこうした機会に鑑賞活動をさらに充実させて題材化を図り、一層魅力ある美術の授業が展開できるよう研究を進めたいと考える。

美術科としての研究課題

現在の極めて少ない美術の時間の中で、指導上、最重要と考える内容は何か、確かな力のつく授業とは？鑑賞力を高める指導とは？等々、美術という教科にとって課題は多い。近い未来に子どもたちが必要とする力とは何であるのか？例えば新学習指導要領にも明示されたコミュニケーション能力の育成を取り上げた場合はどうであろうか？現在の子ども達はどこにいても話ができる便利な道具を持っている。しかし、不特定多数の人間とメールのやりとりができて、教室ですぐ隣にいる人と上手くコミュニケーションができないという皮肉な状況がある。コミュニケーションの手段は、何も文字や言葉だけではない。形や色彩、音、パフォーマンスなど多様な手段、方法がある。当然美術の表現ではそれらを総合的に駆使し、表現手段として用いている。その表現の一つとして、今や映像はテレビやインターネット上で大きな力を発揮し、世界を動かしている。そうした情報を適切に判断し、読み取る力はまさに美術の授業で培う能力の一つである。そもそも美術という教科は思考力、判断力、表現力の育成に大きく関わる教科であり、それらを視覚的により具体化し、学習できる教科であるということを確認したい。

今回の研究テーマである創造性や豊かなかかわりは、人やモノ、地域、環境などとの様々なかかわり＝コミュニケーションを通して互いの関係を確認し、より深いつながりを見出すことによって、人間として大切な価値を発見し、現実生きる力としての人間力をはぐくむことができるとの認識に立ち、その過程で発想し、構想し、創造力を培うという美術科のねらいを実現することができるとの仮説に基づいて設定されたものである。そこで、本研究では、この「かかわり」について以下の三つの視点で考えることとした。



1 人とかかわる 美術

人は社会の中で、人とかかわりながら育つ。親と子、師弟、仲間といったかかわりは人が育つ上で重要な要素である。人は色々なかかわりを通して、社会に適合していく。そうした一連のかかわりはそこにある文化を伝えるという点でも欠かせない。おそらく美意識の根幹は人々のかかわりから生じ、それを共有することでまた新たな時代の文化が形成されると考えられる。



美術の授業でよく取り上げられる作家、ゴッホやゴッギャンも互いに求め合う普遍的な美を共有しつつ互いを刺激し合うことで、新たな発想を生み出し創造の源を得たように、人と人のかかわりこそ自己を成長させる上で最も大きな力になる。美術の活動では作品づくりを通して互いの違いやよさを認め合うことをはじめ、具体的な芸術体験を通して学習を共有できるというよさがある。本研究では、そうした学習効果を確かめながら、美術の活動を通して人のかかわりを広げ、深めていけるような方途を考えたい。

2 モノとかがわる 美術

世界にはさまざまな建造物が存在するが、それら建造物はその地域にある材料を生かしてつくられている。こうした材料、素材とのかかわりは、人々の長い暮らしの中で有効に資源を活用しようとする人々の知恵から生まれている。モノとのかかわりを知ることは、限られた資源をより継続的、有効に利用していこうとする未来に向けて必要不可欠な学習である。匠に学ぶ伝統の技は、けっして先達の技術的遺産を継承することのみではなく、技術革新によって受け継がれ、さらに磨かれている。その中には、目の利益にとられすぎず、基礎的な研究で大きな成果を得ている例が多い。一見何の関係もないような材料、技術を他に転用することで意外な発見や利益が生まれる。それは過去の発展の歴史からも見てとれる。こうした柔軟な発想も、もとはといえば人とモノとのかかわりが出発点となっている。いまや流通経済の大きなうねりの中にあって国際的な事柄に無関心ではいられない状況にある。そうした中で、現代美術が提唱する問題は素材そのもののもつ意味を作品としている例が少なくない。モノとのかかわりを考えることは、もう一度表現そのものの意味を問い直すことでもある。

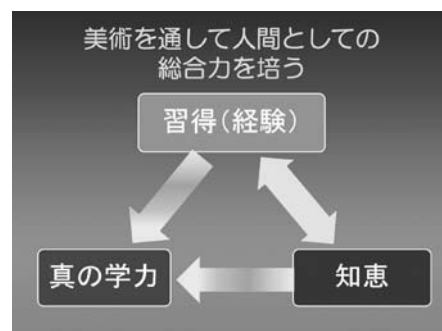


3 環境とかがわる 美術

人を取りまく空間や場を共有することでかかわりを深め合うことは多い。家族、地域、学校など、そこに共に暮らすことで、知恵を育み、周囲の環境に対する考え方が培われる。人はもともと家族という場で最初に人と人とのかかわり方を学び、さらに地域社会の中で様々なかかわりを体験しながら成長する。その場や空間、環境は成長の過程で大きな影響を与える。当然、それはまた美意識にも深く関わってくる。美術の授業で取り上げることが多い茶室建築を例にとれば、その空間全体が茶道の精神性を集約した意味をもった場である。また、幾多の年月を経て世界遺産に指定されるようなさまざまな建造物などは祈りを形にしたものが少なくない。それは単なる建造物ではなく、人々の精神的なバックボーンとなるような価値をもつものであり、そこに集う人々の生活にも深い関わりをもっている。このような環境とのかかわりは、美術では重要な要素である。とりわけデザインの学習では、そうした総合的な環境とのかかわりをユニバーサルデザイン、エコデザインなどで生活を快適に、豊かにできるような学習を展開している。本研究では環境とのかかわりを考えることが表現の意味を探究する学習や次の世界を創造する学習にもつながると考える。



本大会の実践から、美術という教科は、体験・経験的な学習による習得によって、生活の中で生かすことのできる「真の学力」を育成し、美術の授業を通して、人間としての総合力を培うことができる教科であると考え。本大会の提案が、各中学校の美術科教師が創造的に実践を行っていくための起点になれば幸いである。



美を自然から学ぶ

講師 東京藝術大学准教授 布施 英利 先生

本日はお招きいただきまして大変ありがとうございます。

私は先生方と同じように美術・芸術を、自分の仕事、あるいは仕事以外の人生観の基本として日々、暮らしております。

先日、私の勤務する大学の研究室にてNHKの「爆笑問題の日本の教養」という番組の収録をしました。その収録では「テレビというものが時代のど真ん中」と言っていて、私の方は「テレビというものはくだらない、芸術の方が素晴らしい」と言いました。例えるならば、テレビとはビールのようなもので、それはどういうことかといいますと、ビールというのは、飲んでいるそのときは気持ちいいのですが、後には何も残らない。ところが、芸術というのは、芸術作品の目の前に立ったときには何も残らないかもしれませんが、そのあとに何かが残る。やはり絵画や彫刻が長い歴史の中で淘汰されずに残ってきたのは、テレビどころではない人間の本質にとって大切な何か強いものがあるからだと思います。そして、また、私たちの現代社会の中でその可能性を開いていくべきだと話をしました。

タイトルにもありますが今日は「美を自然から学ぶ」という内容でお話させていただきます。「美」というキーワードの他に「自然」ということですが、「美」の創造にとって、あるいは「美」を養う心にとって大切なものではないかと思えます。

「美」の最高の教師は「自然」であると考えておきまして、「美」を創造していく上で、何から学ぶのかといいますと、先生や西洋のクラシックな技法など様々なものがあると思いますが、その更に向こう側に「自然」があるのではないかと思えます。

私の著書の中に「絵筆のいない絵画教室」という本があります。もちろん絵画において絵筆が要らないわけではないのですが、ここで言いたいのは、絵を描く上で一番大切なものは何かということです。私は大学院の中でプロになろうとする学生たちを教えています。子どもたちとは若干立場は違うと思いますが、美術大学を卒業しているのですから、絵画の技術的なことは一通りできます。しかし、絵筆を使いこなすだけでは「美」というものは生まれない。絵筆を使いこなすだけでは本当の芸術というものは生まれなくて、使いこなせるようになった後に、一体何をしたらよいのかということを追究しているのが私の研究室で、大学では美術解剖学と言っております。

そこでやってきた実践を小学生に対して行ったことがあります。

具体的にどうしたかと言いますと、魚の絵を子どもに描いてもらいました。やったことに沿って順番にお話させていただきますと、子どもたちにまず一枚魚の絵を描いてもらいまし

た。例えば、小学校6年生ですが、たい焼きのような鱗は直線の交差で全然鱗らしくなかったり、ぬいぐるみのように生きた感じがしなかったり、どの子が描く魚も一様に横を向いている…そんな絵を描いてきました。

ここから私の絵画教室が始まるわけですが、活動を通して絵が二日間でどう変わるのかということなのです。1枚魚の絵を描いた後、ヘラブナやワカサギがいる湖に魚を釣りにいきました。教室やアトリエの中で魚を見るのではなく、実際に魚がどういう所に生きていてどんな感触がするのかということを五感で感じてもらうために釣りに行きました。

次に釣った魚を解剖しました。本来、大学では医学部などに行って人体の解剖を見学させてもらうのですが、ここでは子どもたちに向けた授業なので、魚を応用として取り上げました。

解剖は美術にとってとても重要なことです。美術大学では一般教養として解剖学の授業があるのではなくて美術の専門科目として解剖学があるわけです。日本では明治時代、東京美術学校と言っていた時代から、更にヨーロッパの美術アカデミーでは17世紀～18世紀から解剖学は行っていました。一般的には、レオナルド・ダ・ヴィンチあたりから始まっていると言われていますが、私は専門分野でもありますから、そもそも美術のすべての始まりが解剖学にあるのではないかと考えています。例えば、一番素晴らしい絵画が何かと言われたときに、私は今まで世界の遺跡や美術館を巡ってきた中で、心を揺さぶられたのは、スペインとフランスで見た原始時代の洞窟壁画でした。それを見たときに芸術はすごいなと思いました。岩の面にいろいろな動物が描いてあるのですが、地面を蹴って走っているドドドドという音が聞こえてきそうな感じがしました。本当に生きた何かがそこにあるような強さがあって、これが絵画なのかと感じました。

ラスコーの洞窟壁画は、動物がとてもリアルで、人間はその隅の方に描かれているのですが下手なんです。何故、あの時代の人たちは動物が上手く描けて、人間が下手なのかと考えると、それは解剖（解体）だったのではないかと思います。

話を授業の方に戻しますが、次に魚を解剖した後に、生き残った魚が水槽で泳ぐ様子を見ました。死というものを見せることでそのコントラストとしての生きることの感動を感じる。それを子どもたちに伝えたくて、釣った魚を解剖した後に泳ぐ魚を見せました。そのときの「生きている」という感じを絵で描けたらいいと伝えて、もう一度子供たちに魚の絵を描いてもらいました。

最終的にどんなものになったのかといいますと、2日前にたい焼きみたいに描いていた子供が、絵の描き方を一切教えなくてもリアルに描いています。この絵は、内臓が透けて見え



ています。解剖の成果をメモしている絵もありました。

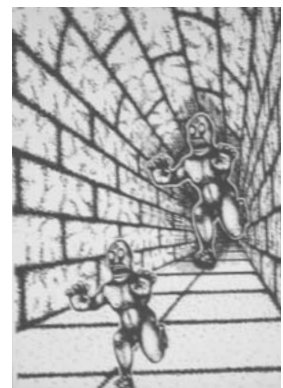
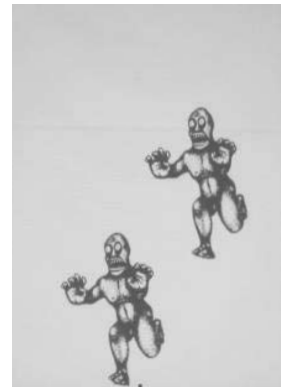
今日のタイトルは「美を自然から学ぶ」ということでお話してきたわけですが、次に自然からどのように学んだらよいかという方法論の提案をしていきたいと思います。自然には風景（山・川・海）ともう一つ人間も自然というふうに考えています。

「モナ・リザ」を例に挙げてお話します。「モナ・リザ」を見て「感動しましたか」と聞かれても、普通はなかなか感動しない。たぶん、どう受け止めてよいかわからない真空状態のような心になるのではないかと思います。私はその状態が芸術ではないかと思っています。では、芸術とは何なのでしょう。エンターテインメントと芸術の違いとはどういったことなのか。いろんな見方があるとは思いますが、その一つとして「時間」。エンターテインメントというのは、すぐに気持ちいいし、すぐに楽しい、でもそのときだけです。一方、芸術というのは、すぐには分からない、すぐに感動できるわけではありませんが、でも永遠の価値をもっている。

ご存知のように「モナ・リザ」は、パリのルーヴル美術館にあります。この写真がルーヴル美術館なのですが、こういうふうにルーヴル美術館を見せると先ほどの「モナ・リザ」が一つの映像ではなく、「あそこにあるんだ」という一つの存在としてのリアリティを感じられるようになる。そこを感じていただきたいと思います。

ルーヴル美術館には、「モナ・リザ」の他に、ダ・ヴィンチの作品が何点かあるのですが、このような作品を何回も見ると、見る度に面白いかというとき必ずしもそうではありません。ある時は、ただ単に「ああ、ダ・ヴィンチの作品だ。」と思ったり、またある時は、思いもかけない発見があったりします。例えば、ダ・ヴィンチの作品は、構図を上・中・下と分けると、上3分の1がみんなブルーに描かれています。そのことに今まで何度も見ているのになぜ気付かなかったのだらうと思うと、そのブルーがとっても心に染みてきて、そのブルーを見ただけでも「いいな」と感じたこともあります。こんな話をして、もう一度「モナ・リザ」の画像をお見せすると、皆さんもリアリティがだんだん感じられるようになってくるのではないのでしょうか。

話は変わりますが、皆さんは「恐怖の洞窟」というのをご存知でしょうか。ある心理学の図形なのですが、これは全く同じ絵がコピーされて並んでいるだけなのですが、これに背景を付け加えます。するとどうなるのでしょうか。まず、遠近法的に手前の人小さくて、向こうにいる人が巨大に見えます。そういう大きさの関係が見えてくると、前の人の方は追いかけていて、後ろの人の方は、威嚇して追いかけているように見えてくる。つまり、背景が変わるだけで、絵というのは全く違う印象になってきます。更に、表情も違って見えてくる。全く同じものでも、二つの表情をもっている…これが「モナ・リザ」にもあるのではないかと思います。「モナ・リザ」の背景には風景があ



ります。砂漠のような山があったり、右側には川があったり、こういうダ・ヴィンチの研究とは全く違う視点で自然を見たり川を見たりした後に、「モナ・リザ」を見ると違った親近感を感じます。

また、「モナ・リザ」は微笑でも有名です。ダ・ヴィンチは「モナ・リザ」に限らず、何枚かの女性の肖像を描いています。ここでは2枚お見せしますが、ロシアのサンクトペテルブルグのエルミタージュ美術館にダ・ヴィンチの2枚の聖母子像があります。一方は、母親の微笑み、一方は慈愛に満ちた微笑…「モナ・リザ」にはたぶん両方あるのではないのでしょうか。このように話しながら、もう一度この「モナ・リザ」の画像を見るとはるかに深みが出てくる、何かが見えてきたのではないかと思います。そして、そういう感覚、そういうものが芸術ではないかと思います。

最初は見えなかったものが、年を経るにつれて何度も見るうちに違ったように見えてくる。いつまで経っても終わることのない発見がある、それが芸術というものの素晴らしさであり、その時だけ楽しくその場で終わってしまうエンターテインメントとは違うのではないかと思います。そして、それを子どもたちに伝えることが大切なのだと思います。

千利休のエピソードに、こんな話があります。ある時、千利休が息子に庭の掃除をさせます。息子は箒で落ち葉を掃き、石に水をかけて「お父さん、終わりました」と報告をします。しかし、「まだ終わっていない」と言われもう一度掃除をします。何度繰り返して掃除をしても、父は終わらせてくれません。とうとう息子はしびれをきらして、「お父さん、僕は庭を十回掃きました。庭の石には十回水を打ちました。これ以上一体何をすればいいのでしょうか。」と尋ねます。千利休は、木を揺すって、息子がきれいに清めた庭に葉を落とさせて「これで掃除が完成した」と言ったといいます。

教訓として大事なものは何かといいますと、極限のぎりぎりまできれいにする、或いは極限のぎりぎりまで技を磨いて、その先に、その最後に出てくるものが「美」を完成させるということ。庭を幾ら掃いても、技術を幾ら磨いても、それは美、芸術ではないかも知れないけれど、それが無ければ完成しない。つまり、教育というものが何かと考えたときに、自由にやらせる前提として、庭を十回掃かせ、ぎりぎりやったその上での自由でないといけないのではないかと思います。自然に学び古典に学び、美を感じ創造する。

では、なぜ美を感じる心を育てることが大切なのかと言われますと、その一つのヒントとして、ノーベル賞を受けたある科学者の言葉があります。「二つの可能性があってどちらが正解かわからないとき美しいほうを選んだ。後で、それが正しいことが分かりノーベル賞の研究になった。」と、つまり科学の最先端の部分でも美を感じる心は必要なことなのです。何かを判断するときに、美意識が大切になってくるのではないのでしょうか。美を育てる心は、あらゆる人の人生の力となる。それが美ではないのでしょうか。

ご清聴ありがとうございました。

研究授業 1	授業者	府中市立府中第三中学校教諭 遠藤 真木子 府中市美術館学芸員 武居 利史
テーマ	人間力をはぐくむ美術教育～いま、求められる創造性 豊かなかわりを生み出す美術の授業	
	【研究の視点】	・美術館との連携 ・常設展示作品の鑑賞による美術館鑑賞の日常化
領域	鑑賞	題材 牛島憲之の作品を味わう〈常設展示の鑑賞〉（2学年）

〈1〉 題材設定の理由

学校と美術館の連携について、府中市においては「府中市立小中学校美術鑑賞教室」を中心に実践が重ねられてきたが、中学校では、生徒が夏休みなど長期休業日を利用し、個別に美術館を訪れ課題に沿って鑑賞するという活動が中心である。しかし、このような形態では授業者の鑑賞のねらいを的確に達成することは難しい。そこで、新学習指導要領の取り扱いを考慮し、鑑賞活動を学習として明確に位置付けた美術館での鑑賞授業を設定した。



府中市美術館 林 裕司氏 撮影

題材は、美術館に併設された「牛島憲之記念館」での鑑賞とし、日常生活の場にある地域の美術館の常設展示作品を対象とすることで、身近な地域の文化的遺産に関心をもたせるとともに、その作品の魅力やよさを十分に味わわせたいと考えた。

題材は、美術館に併設された「牛島憲之記念館」での鑑賞とし、日常生活の場にある地域の美術館の常設展示作品を対象とすることで、身近な地域の文化的遺産に関心をもたせるとともに、その作品の魅力やよさを十分に味わわせたいと考えた。

〈2〉 指導目標

身近な美術館の作品を鑑賞し、そこで感受したことをもとに生徒が自分の意見を述べたり、様々な意見を聞くことにより、自分だけでは気付かなかった視点や価値に気付くとともに、作品に描かれている内容の理解だけではなく、作品がもつ情緒的な雰囲気やメッセージを感じ取ることができる。

〈3〉 授業者自評

○遠藤真木子

新学習指導要領に示された鑑賞の具体的な授業例ということで、ギャラリートークを取り入れた授業を組み立てた。生徒と美術館とのかかわりが日常的になるよう、鑑賞作品の決定から作品のよさをどのように伝えるかなど、担当学芸員と話し合いを重ねながら授業づくりを行った。



授業は2時間の構成で、前時の1時間は展示テーマである季語について、季節らしさとは何か？を理解させ、牛島と同じ季語をもとに色面構成を行わせた。授業後の感想だが、生徒に思いを述べさせることの難しさを実感した。発問の方法やタイミングなど、まだまだ十分でなく、今後の課題としていきたい。しかし、本物の作品を鑑賞できる美術館での鑑賞授業は、生徒にとって大変有意義であり、今後も連携を深めていきたい。

○武居 利史

府中市美術館の教育普及担当として鑑賞教室に取り組んで8年目になる。これまでは小学生が中心で企画展に注意が向きがちだったが、今回は中学生が所蔵品に親しんでもらうということで意欲的に取り組んできた。

ギャラリートークは、対話が主体のオーソドックスなやり方をしたが、中学生に対する経験不足から緊張した。中学生は、言葉にするのをためらいがちで、それを引き出すのが難しいと思っていたが、実際には予想以上によく話してくれた。生徒たちはそれぞれ自分なりによく見てくれていた。事前に季語をもとに考えたことで興味が高まり、自分から作品と向き合えていたと思う。自分もよい経験になった。



〈4〉 質疑応答

- Q** : 作品のキャプションははずせないか？（この授業では生徒が事前に季語から色彩構成を行い、それにふさわしい絵を探す取り組みをしたが、実際には絵ではなくキャプションを見て直ぐにわかってしまったので。）
- A武** : 美術館としては難しい。しかし、今回の内容に対応し、季語の説明文は隠した。
- Q** : ギャラリートークでは、『何が描いてある？』から始めるが、『何を感じるか？』から聞いてもよいものか？
- A武** : 『何が見えるか？』から始めるのはニューヨーク近代美術館が編み出した方法で、ベーシックに視覚から入ると皆が共通のスタート地点に立てる。『感じる』から始めると間にワンクッション入ってしまう。しかし、TPOによりそのやり方もいいと思う。
- Q** : 今回のギャラリートークの仕方はどう決めたか？
- A遠** : どう見せるか話し合い、2人で決めた。
- A武** : 何を展示して見せるかは美術館の判断なのだが、今回は通常の展示を授業に用いた。『季語の情景』というテーマはたまたまこの取り組みにあった。
- Q** : 事前の取り組みで色彩構成をちぎり絵でさせた意図は？
- A遠** : 短時間で表現しやすいため。カラーペーパーの60色ぐらいから選ばせた。
- Q** : 中学校と美術館が近くて条件のよい地域だが、美術館によく来る生徒と初めての生徒との反応の違いを感じるか？
- A遠** : 自分の学校の生徒ではないのでよく分からない。府中市は小学校の時、必ず美術館に行っている。プライベートでよく通っている生徒は少ないと思う。
- Q** : 1時間目の授業での俳句の活用の仕方はどのようにしたのか？
- A遠** : 身近なものを紹介した。季語について理解させるため。その他に風景写真を見せ、季節の感じ方の練習をさせた。生徒は写真を見て色だけでなく、様々な要素からトータルで季節を感じる事が出来ていた。

Q : この生徒は、美術館が近くにあり羨ましい。近くにない生徒に対してよい手立てはあるか？

A 遠 : 近いからよいとは限らない。近くでもクラスなどでまとまって訪問することはない。

A 武 : 府中市では中学1年生対象に鑑賞教室があるが、実際には困難もある。昨年度、ようやく全校で取り組むようになった。美術館からも訪問したりするなど、今後とも工夫が必要と考える。

〈5〉 指導・助言

東京都教職員研修センター（東京教師道場）教授 松井一雄 先生

美術館・博物館を活用した授業を行おうと思うなら、自ら飛び込むこと、それが第一歩である。美術館でも学校の役に立ちたいと思っており、その方法を模索中である。

また、学芸員の方に“お任せ”という姿勢ではだめ。美術の授業なのであるから、教師がねらいをもって指導案を作成する姿勢が大事である。

総合的な学習の時間のグループ行動や修学旅行の活動の中でも、美術科が主体的にかかわり、例えば、ある時間帯に生徒全員を集合させて、学芸員や住職の方に講義をしてもらうという活動も考えられる。とてもよい鑑賞の機会となるのではないか。

また、美術館から学校に学芸員の方に来てもらうのもよい。持参した作品を触らせていただくなど、その時ならではの体験も可能となる。

飛び込み、活動することで成果は生まれる。行動することで鑑賞力は高まるであろう。



研究授業 2	授業者	東大和市立第二中学校教諭 未至磨 明 弘 府中市美術館学芸員 成 相 肇
テーマ	人間力をはぐくむ美術教育～いま、求められる創造性 豊かなかかわりを生み出す美術の授業	
	【研究の視点】	・美術館・美大生との連携 ・人とのかかわり
領域	鑑賞	題材 ビエンナーレ作品鑑賞〈企画展示〉（1学年） 武蔵野美術大学生とともに授業を展開する＝むさしとヤマトアートプロジェクト

〈1〉 題材設定の埋田

本研究主題は東大和市中学校美術部会として、ここ数年取り組んでいるものである。近年、各地で学校や街を美術館にするプロジェクトなど、地域を巻き込んだ美術教育の実践があり、美術科における教育活動の場が学校にとどまらない広がりをみせている。それは生徒にとって美術教諭以外の作家や学生との交流、地域に出たの美術活動が、日常の授業とは質の異なる新鮮さや感動を与え、より興味をもって取り組めるからであろう。もちろん、日頃の美術科の授業の充実が何より大切なことであり、本研究主題はその上に成り立つものである。

これまで人間が人との出会いやかかわりによって文化や芸術を創り上げてきたように、生徒にとっても新たな人との出会いが自己の視野を広げ、人間と美術のかかわりを考えるきっかけになると思う。また図版や写真ではない本物の美術作品を観ることは、素直な感動を呼び、そこから美しいものや造形作品を愛する心が生まれ、生徒の人間的な成長につながるものと期待する。

今回、武蔵野美術大学、府中市美術館との連携により授業を行うこととした。美大生は中学生とも年齢が近いので、教師とは異なる視点で生徒と接することができる。また学芸員は非常に専門的な知識とともに日常的に作家とも連絡を取り、美術館の企画・運営を行う立場にある。それぞれが立場の違いを超え、そのよさや専門性を活かしながら授業を行うことにより、生徒にとって大変有意義な鑑賞活動が行えるのではないかと思う。

東大和市は美術館などの文化施設には恵まれない面があるが、武蔵野美術大学が隣接市にあり、交通・連絡の便が非常によい。そして何より教職課程研究室三澤教授のご尽力とともに美大生の皆さんが快く協力をして頂くことで、この授業が実現に至った。今後、この研究の検証や改善を図りながら更に継続し発展させていきたい。



〈2〉 指導目標

- (1) 「本物」を鑑賞することでそのよさや美しさなどを素直に感じ取る。
- (2) ワークシート・ミッションシートを活用しながら美術作品の鑑賞をすることで、人と美術のかかわりについて興味をもつとともに、発表を通して互いに尊重し、認め合う態度を育成する。

〈3〉 授業者自評

授業は、美大と美術館と連携して行うということを考えた。もともとは、東大和市の美術科教員たちで美大との連携ができないかということを考えていたところ、今年、三澤先生が赴任されて声をかけていただいたことで実現に至った。

日常の授業では美術科の教員が一人で行うところを、美大生や学芸員など、立場が違う人たちに参加してもらうことで、生徒たちが意欲的になり、新しい発見が出来るのではないかということが一番のねらいである。今回は美術館のビエンナーレ作品を鑑賞することにしたが、事前に生徒たちと年齢の近い美大生に「こういう視点で作品を鑑賞しよう」というメッセージをミッションという形で考えてもらった。専門的な説明は学芸員の方をお願いして、色々な角度から生徒たちにアプローチしたらどうなるのかということを確認する意図で授業を行った。授業としては時間が足りない面もあったが、生徒たちはよく鑑賞していたと思う。発表する時間や発表を聞いた生徒たちとの意見のキャッチボールのような場面があればもっとよかったが、時間が足りなくて出来なかった。最終的にはミッションのカードに書いてもらったが、生徒たちが細かい点まで鑑賞しているのが分かった。今後もこのような形態の授業を応用したものを継続していきたいと考えている。課題は、発表する場所の確保や全部の作家の作品が鑑賞出来なかったことである。浅間中の生徒や美大生の皆さん、三澤先生、学芸員の成相さんには大変感謝している。



以上、府中市美術館 中嶋 仁司氏 撮影

〈4〉 質疑応答

Q：生徒たちはミッションを見て、すぐに作品のところに行ったが、事前に決めていたのだろうか。また、第3時の授業はどのようにもっていくのか。

A：生徒たちは、今日初めてミッションを見たので、事前には作品を決めていない。ミッションを見て、その場で話し合ったのではないかと。第3時としては、他の人の意見も示したいの



で、今日集めたワークシートにコメントを入れて掲示したい。協力してくれた学生たちからの手紙やメッセージも届けてほめてあげたい。授業としての時間確保は難しいので、そんな形で考えている。

Q：今日の鑑賞のポイントはミッションの言葉だと思う。それらを考えていく過程を紹介してほしい。

A：先生と学生で絵の前に立ち、話をしながら言葉を考えていった。「ここに注目して欲しい」と思うところから、自ずとそこに注目させるようなミッションが浮かんだ。生徒たちが作品を鑑賞する時のきっかけになったと思う。ミッションを提示する側がよく鑑賞することも大事だと思う。



〈5〉 意見・感想等

- *発表の時、もう少し発見したもの等、語らせるとよかったのではないかな。また、作品を絞って色々な意見を出したり、深めてもよかったのではないかな。
- *生徒たちが、友だちの意見を聴いて拍手していたのが印象的だった。そういった共感をさらに深めていく工夫があってもよかったのではないかな。美大生と中学生のコミュニケーションがよくとれていた。これからさらに発展できる教材だと思う。

〈6〉 指導・助言

武蔵野美術大学教授 三澤一実 先生

中学生と美大の学生は年齢が近いので、自分たちよりも少し先に行くお兄さん・お姉さんたちが何を考え、どのように感じるのか興味をもつだろうと期待するところがある。学生側にとっても自分が中学生だった時を思い出しながら問題を作成していった。学生に聞くと、問題を作ることが楽しかったと言っているが、これが今回の一番の収穫だと思う。

この授業を中学校で行うときに、3年生が2年生に問題を作ったり、クラスでグループAがグループBに問題を出すなど、問題の作成者と問題を理解する立場が入れ替わることができる。問題を作るには、前提として作品をよく鑑賞することが必要になる。

今回の授業では、作家の情報を少なくして、学生たちが感じたことをひとつの切り口にして、中学生に示した。学生たちは子どもたちに「これは私たちの感じ方であって、様々な見方をしてほしい」と言っていたが、ミッションというものはひとつの方法にすぎないので、多様な見方が出来るということに気付いてくれたと思う。また異年齢、異校種の魅力・連携のあり方を示すことになったと思う。

今後の課題は、あるグループが感じたことをクラス全体でどこまで共有し、深めることが出来るかということと、自分の感じたことを相手に伝える力を養うことである。これはそれぞれの授業で段階的にねらいを絞って組み立てていけば、洗練されたプログラムになっていくと思う。

鑑賞は、個人の経験の差もある。自分に経験のない言葉に出会った時に「ああそういう見方もあるんだな」と見方を広げることにつながると思う。自分の見方・感じ方を大切にして、自分の生き方につなげていく、生き方にかかわるような多様な要素が鑑賞にはある。そういったことを授業の中で段階的に実施して、これからもよい授業を実践してほしい。

研究授業 3	授業者	府中市立府中第八中学校教諭 府中ビエンナーレ出品作家 府中市美術館学芸員	中 川 園 子 原 高 史 神 山 亮 子
テーマ	人間力をはぐくむ美術教育～いま、求められる創造性 豊かなかかわりを生み出す美術の授業		
	【研究の視点】	・美術館・作家との連携	
領域	複 合	題 材	ビエンナーレ作家との協働による授業 「352人の小さなノート」 (2学年)

〈1〉 題材設定の理由

現在、中学生のコミュニケーション能力の低下が指摘されている。そこで、美術の活動を通して自分の思いを相手に伝える力、他人を思いやり認める力を育てたいと考え、この題材を設定した。

今回は、美術科教師と現代美術の活動を展開している作家とのコラボレーションによる授業というかたちで試行してみた。生徒が直接作家とかかわり、一緒に作品を制作するという体験を通して、美術の授業に対する意識を変え、新しい視点で創造することの面白さを感じるとともに、作家の創作活動に直に触れることを通して、美術への興味・関心が一層深まるであろうと考えたからである。

〈2〉 指導目標

- ・作家とともに表現活動をすることで、ものを創造する態度への理解を深める。
- ・制作の過程を通して、自己の内面を深く見つめ、感じ取ることと表現のかかわりに気付く。
- ・制作の過程の中で、疑問に思ったことや感じたことについて、自分なりに考え、新しい価値観を発見する。
- ・完成した作品を鑑賞し、生徒同士が発表し合うことで、お互いのよさを認め、幅広く作品を味わう。



〈3〉 授業者自評

○授業者1 (美術科教諭)

これまで、3ヶ月をかけて作家との細かい打ち合わせをしてきた。初めは生徒たちと一緒に何かつくるというアイデアもあったが、作家の原さんが生徒たち一人ひとりと話してみたいということで、その中から、作品の具体的な形ができてきた。作家の原さんが一人ひとりの生徒に直接インタビューをした結果、質問に答える形でのノートによるコミュニケーションが明確になっていった。1週間に一度、2～3週間にわたるインタビューによって、作家の原さんの人柄、作品の意図、熱意が伝わり、生徒たちは原さんに会うことをとても楽しみにしていた。インタビューを通してノートに自分の言葉を書き込んでいく行為が、生徒たちにとって興味深いものとなり、最後まで関心をもって制作を続けることが出来た。自分の思いを言葉にするということで、家族へのインタビューなどは休み中の課題にしたが、提出率もよく、興味・関心をもっていることが分かった。

制作したノートが、いずれ美術館に展示されることは伝えてあったが、今回、展示されたものを初めて見た時、説明を待つまでもなく、作品に近寄り熱心に鑑賞する姿を見て、作家とのコラボレーションはうまく行ったと思った。今回の試みがうまく出来たのは、学校、美術館、作家の協力があつての

ことと知っている。

○授業者2（ビエンナーレ出品作家）

いままで縁の無かった中学生の実態に触れ、自分の想像していた中学生の姿とずいぶん違った印象を受けた。352人一人ひとりにインタビューする時にも、初めから、「きっとこうだろう」といった先入観をもって生徒たちに向き合うことは避けた。初めから予想してかかることが一番危険だと考えている。また、いずれ美術館に展示されることがわかっていたので、質問の内容によっては、インタビューには答えていても、ノートには書かない生徒もいたがそれもひとつの表現と考えている。

今回は質問に対しての答えが重要なのではなく、考えるきっかけがそこに生まれることが大切だと思う。今、この活動の意味を問うのではなく、生徒たちが何年か先にこの活動を通して感じたことを思い出し、自分を取り巻く社会や自分自身に目を向け、ものごとを考えるきっかけになってくれればよいと思っている。

○授業者3（美術館学芸員）

このようなワークショップは、学校と作家、美術館の三者のバランスが難しいことが多いものだが、今回は生徒たちが個々に作家との密接なかかわりをもてたことと、作品として完成する過程をともに共有できたことでうまくいった例だと思う。原さんはこれまでも、ドイツやシンガポール等海外でインタビューをもとに、一人ひとりのもつ記憶を掘り起こし、それをテーマにした絵画の制作活動を行っているが、今回も生徒とのノートによる言葉を使ったコミュニケーションはうまくいったと思い、三者のコラボレーションは成功したと考えている。



府中市美術館 村井 旬氏 撮影

また、美術館の働きとしては、実際展示にかかわった生徒は、一冊一冊のノートをホチキスで留めていく作業をして、作品が出来上がっていく過程を共有でき、とてもよいコラボレーションとなった。美術館が大勢の人に、作品提供の場になっていることも、実際に体験してもらってより理解が深まったと思う。

〈4〉 質疑応答

- Q：生徒の制作したノートを見ると、文字による表現だったが、これは、国語的な内容表現になるのではないか。美術で扱うことにやや違和感を感じたがどうか。
- A：「言葉」もひとつの材料、絵画的要素として扱っているので、充分作品として成り立っていると考えている。
- Q：評価の問題をどうとらえているか。
- A：文章の内容がよく書けている、書けていないという点を評価すると、それは、確かに国語の扱いになる。しかし今回は、美術に対する興味・関心ということで、生徒が自分自身に目を向けて、考えたり感じたりきっかけになることを主に目標にした。評価については難しい問

題で、これからの課題と考えている。

Q：ノートの中にあった質問はどこから出てきたものか。

A：インタビューを通して、中学生が、大人を非常によく見ていることを強く感じた。また、中学生をとりまく社会や学校、家族というものについて、将来を見据えて見つめて欲しいとの思いから、設問を考えた。



Q：とても興味深い内容のノートなので、ぜひ、学校に持ち帰り活用したいと考えた。この場合、著作権の問題が生じるか。

A：このノートは、今回作家と生徒たちとのコラボレーションによって生まれたもので、これを機会に、各学校で、今後、先生方がこんなふうに使いたいというさまざまな工夫や取り組みをして、質問内容を変えたり、発展させたりしていくことは可能だと思う。

〈5〉 意見・感想等

- *美術の広がりを感じるとてもよい授業だったと思う。作家の原さんが何ヶ月もかけて生徒に関わり、352人一人ひとりとコミュニケーションをとるといふ、共有した時間があったことだと思う。何より自分の制作したノートが現代アートとして完成し、美術館に展示されたということで、感動があったと思う。授業が開始される前に作品に近寄り、おもしろそうに自他のノートを読む姿を見て、生徒の関心がとても高いということが分かった。作家、教員、学芸員三者がそれぞれの役割りを発揮した、興味深い授業だった。
- *府中市のような恵まれた環境にない学校が多いなかで、今回のような授業が、学校で形を変えてどのように活かせるかが課題だと思った。アーティストが学校を訪問することは、実際かなり試みられているので、これからも、今回のように形を変えた試みがされるとよいと思った。
- *鑑賞についての評価の問題は、ただ見せればよい、感想を書かせればよいというものではなく、これから様々な方向から考えるべき課題だと思う。

〈6〉 指導・助言

東京都教育庁指導部 義務教育特別支援教育指導課

指導主事 松永かおり 先生

「大会ならではの、普段はなかなかできない授業を行う。」という、本大会のコンセプトに則った刺激的な授業であったと思う。相当な打ち合わせと準備を重ねた上で、教師と、作家と、美術館が互いを理解した上で実践されていたことがよく分かった。

今回のような連携した授業を行う際に最も注意すべきことは、「生徒に何を身に付けさせたいのか」を明確にし、共通理解した上で実践することである。学校であれ、美術館であれ、場所はどこで行うにしても、あくまでも「授業」であるので、目的が不明瞭なまま実践してはいけない。

最近、美術館と連携した授業が幅広く行われるようになったが、とりあえず子供たちを美術館に連れてきてただ見せるだけであったり、ワークショップへの参加も全くの学芸員任せであったりなど、

多くの課題が見られる。

美術館へ連れて行くにしても、学芸員とコラボレートした授業を行うにしても、授業におけるねらいを明確にして、生徒がねらいに添った鑑賞ができるように導く。そのためには、連携する者同士が念入りに打ち合わせた上で、役割分担を明確にして、実践することが必要となる。

本時の場合、作家の原さんは、生徒一人ひとり記入したノートが、集合体となって展示され、作品となったことで、どのようなメッセージ性を持ち、アートとして成立するのかを分かりやすく説明し、アーティストという職業やアートの多様性について、分かりやすく語ってくれていた。また、学芸員の神山さんは、美術館という空間がもつ力や展示するという行為によって作品のもつ力がどのように増すか、また、来館者にどのような影響を与えるかなど、美術館のあり方について説明してくれた。生徒は自分の作品がアートとして、見る人に影響を与える形に仕上がったことを体感しつつ、様々なことを学び取っていた。

今後の課題としては、生徒自身が書いたノートや、本時の鑑賞について、どのように評価を行うかという点があげられる。協議の中では、生徒たちがノートの中に表現したものは「言葉」なので、その「言葉」そのものを評価するのか？国語との違いは何か？などの議論が出ていたが、教師はねらいに応じた評価の観点や評価材料を明確にして臨まなければならない。その際に、美術における言語活動は、美術の授業として設定したねらいに応じて行われるものであり、国語的な評価をするものではないことを踏まえておく必要がある。

また、生徒たちが発する言葉の奥にある、生徒自身の内面性や心情の変化を鋭くとらえて評価するためには、日常的に教師が一人ひとりの生徒をどれだけ観察し、理解しているかが重要なポイントとなるはずである。



研究授業 4	授業者	東久留米市立東中学校教諭 武蔵野市立第三中学校教諭 武蔵野市立第六中学校教諭 府中市立若松小学校教諭	藤井義法 三浦悦子 市野美香 大杉 健
テーマ	人間力をはぐくむ美術教育～いま、求められる創造性 豊かなかかわりを生み出す美術の授業		
	【研究の視点】	・小学校と中学校の連携 ・人や場とのかかわりを重視した活動	
領域	表現	題材	小学生と中学生が共同で生み出す授業 「新聞紙を使って」 (1学年)

〈1〉 題材設定の理由

本題材は、大会テーマのキーワードである「かかわり」から、小中共同の活動を通じて、それぞれが学んできた事柄を互いに出し合い、かかわり合いながら、よりよい作品を生み出す授業を通じ、個々の情操を養うことをねらいとした。

この実践はすでに武蔵野市教育研究会図工・美術部会で、数年にわたって取り組んできている「義務教育9年間を視野に入れた美術教育プログラム作成」の一つである。

本題材は、コミュニケーションの力を高めることや、価値を創成する活動でもあり、刺激し合いながら、表現力を高めていく効果が期待できる。



〈2〉 指導目標

小学校 造形遊びを通して、新聞紙という材料や体育館という空間を基に、互いの考えを合わせて表現する。

中学校 小学生や友人たちとともに主題を考え新聞紙や空間を基に想像力を働かせて、構成し、構想を練る。



〈3〉 授業者自評

ほぼ同じ地域に居住し、同学区に通う小・中学生が協力しあって構想を練り、作品造形をしていくという、小・中学校が連携して行う授業の紹介である。しかし、1時間の活動であるため、あっという間に時間が過ぎて短い感想を受けた。今日のはじめて出会った児童・生徒であったが、「もっと時間がほしかった」「もう一度、他のグループの作品がみたい」「自分だったら、こんな題名をつける」などの感想から、協力し合って行う活動の目的は十分達成されたものと思う。



この題材は、武蔵野市で3年前から行って積み上げてきた。小学校と中学校が、お互いの年間計画に対する理解も不十分ななかで、連続性がどこにあるのか、児童・生徒にどんな力を育てたいのかが課題となっている。

〈4〉 質疑応答

Q：新聞紙にボリュームをもたせるよう、ビニール袋も用意したらどうか。

A：今後検討していきたいと思う。

Q：この小中連携の活動は、作品として形にしていかなければならないのか。

A：今後検討していきたいと思う。

Q：「まるめる」「ちぎる」といえば、生徒はそれだけになってしまわないか。子どもの発想にまかせ、事前に示さないほうが色々な発想が広がるのではないか。

A：3年間の実践の中ではそうした事もやってみたが、今回は時間内に形にすることを考えて制限する方法をとった。

〈5〉 意見・感想等

*杉並でも小・中学校の交流をしたが、1時間の活動では、納得するまでやるには「短い」という感想をもった。

*小中連携の連続性がどこにあるのか、どんな力を育てたいのかを明らかにしていく必要があるのでは。例えば、小学校の「造形遊び」は、中学校に行くとなくなってしまいが、どのようにつながるのか知りたい。

*中学生のリーダーシップを培うだけでなく、小学生の「びっくりした」というような表現方法からも学ぶべきものがある。

*小・中学校の教員の交流がなかなかできない現実がある。小中連携とはいっても子供たちの様子もよく分からない。形にしなければ美術といえないのか。中学3年生の評定という現実重いものである。

*現実から言うと、授業を通した生活指導もある。小中連携によって1人の生徒について、小・中学校の先生が互いに知るとするのは利点だ。

*小・中学校の図画工作・美術の授業の中で、小学校では「作業」といわず「活動」。「つくる」といわず「表す」と言う。



〈6〉 指導・助言

東京都教職員研究センター 教授 岡本昌己 先生

導入が長かったのでやや小学生が疲れてしまったようだ。

「新聞紙を使って」という題材だと子どもは何をしてよいのかわからない。「先生はどんなことをさせようと思っているのだろう」「何を伝えたいのだろう」と感じてしまう。題材名は他教科では主題名とか単元名と言う。題材の題は、主題のこと。材は材料。題材名にメッセージ性を与えてほしい。

体育館のような活動の場でも、つくりたいものを選んでいくような条件設定があると、豊かな発想が生まれてくる。活動する子供たちが選べるような補助的な物があってもよい。



「新聞紙を使って」という題材は八王子市でも行った。現在、幼・小・中・高の美術のあり方について、文言もふくめて研究している。

子供たちに経験させ、考えさせる活動を通して、どんな力を育てたいのかを考えなくてはいけない。図画工作・美術の教科性は途中の児童や生徒の活動場面をとらえていくことも大切である。

研究授業 5	授業者	西東京市立田無第四中学校教諭 木原美恵		
テーマ	人間力をはぐくむ美術教育～いま、求められる創造性 豊かなかかわりを生み出す美術の授業			
	【研究の視点】	・モノとのかかわり ・材料や用具の特性を生かした表現		
領域	表現	題材	モノを生み出す人の心 木から小刀でつくる ～町おこしグッズ（2学年）	

自分にはしか考えられない。
自分だからこそ表現できる
府中のシンボルとしての守り像

〈1〉 題材設定の理由

人の心のあり様、もち様により、モノは大きく姿や用途を変え、見る人、使う人の印象も大きく変わる。本来、モノ（道具や材料）は、人類の文化を背景とし、それを使う生活に密着した学びを伴うものであった。しかし、現代社会においては、「生活体験」が乏しく、実生活における人の心とモノの関係性が希薄となり、ややもすると、モノについて安易に考え、お金を払えばいつでも手に入ると思われている。しかも、大量生産の時代を反映して、創造されたものに宿る匠の技や心、価値といったところまでをくみ取ることは難しい。特に、道具としてのモノの一つである刃物は、本来の正しい使い方を学ぶ機会が乏しく、短絡的に人の心の闇をも映し出す凶器としてのイメージすらある。そこで、本題材では、扱う人の心や創造性によって道具（刃物）が便利なモノになること、同じモノでも工夫を加えることによって、素材・色・形を自在に変えることができ、心豊かな生活を作り出せるモノに変容すること、さらにそれを使うことでモノづくりを楽しむことの喜びへと広げて行きたい。

〈2〉 指導目標

- ・モノ（材料、道具）のもつ意味、性質を理解し、その魅力を感じ、モノに興味をもたせる。
- ・素材からどのような表現ができるかを多様に考え、各自のイメージを具体的な形に表すことができる。
- ・材料の特性をいかし、道具を正しく扱って、自分の思いを表すことができる。
- ・モノ・ものへの可能性を広げ、見方、感じ方を深めさせる。

〈3〉 授業者自評

初めて会った生徒に授業を教えるというのでかなり緊張はしたものの、限られた時間の中でいかに思いを伝えられるかを考えながら授業に取り組んだ。自分がこの授業に込めた一番の思いは、モノとのかかわりを通して、どのようにしたらモノ本来の素晴らしさを引き出すことができるのかという点だった。そして、経験がすごく乏しい生徒たちにいかにして多くの体験をさせることができるか…というところから、今回の「府中の森の守り像」という題材を考え出し、実施した。あくまでも、今回は提案型の授業ということだったので、今までの研究の成果を示す授業というよりも、新しく考え出した題材として取り組んできた。

まず、注目したかったのはナイフという道具である。我々の身近ではナイフというものは、あまり使わず、生徒は、ややもすると凶器に使うということぐらいしか考えられないような道具と受けとめている。その本





当の素晴らしさとは、一体どのようなものなのか、わずかでも体験できたらという思いで、ナイフを使った授業にしてみた。どうしたら、作品として完成に導き、しかもナイフの素晴らしさを引き出せるかと考え、色々と試行錯誤をした結果、もっとも我々の身近にある木と言う素材を使用し、しかも今回はバルサ材という柔らかい素材＝モノとのかかわりという点から制作をした。ただ、バルサ材だけではなく、他の素材とも比較させながら学ばせたいため、竹や紙粘土を使いながら、生徒の想像力に働きかけたことで、それぞれの材質の素晴らしさや特徴を少しずつ学習できたように思う。

さて、これまでの授業でナイフを全く使ったことのない生徒たちだったので、使い方を最初から教えたが、初めは不慣れだったために怪我也多く、その後の不安があった。しかし、使用するうちに徐々に慣れ始め、ナイフの魅力が少しずつ分かりはじめたように感じられた。そして、今回の授業のまとめの発表において、人とモノとのかかわりについて、感じ学んだことについて、こちらが意図することを正しく理解してくれていたことが最大の喜びであった。今回の授業は、まだまだ、改良の余地があると思うので、ぜひ多くの助言をいただきたい。

〈4〉 質疑応答

司会：今回は、提案型の授業ということで、それぞれの学校に持ち帰ってどのように発展させていくか。また、この授業について付け足したり改良したりすることを考えて、この話し合いを進めていきたいと考えている。

Q：短い時間の中で三つの素材が盛り込まれている。1年間で限られた題材だけで終わってしまうことが多い中で、この題材はよいと思う。

また、美術の授業を不得意と感じる生徒にとって、想像力を膨らませることのできる紙粘土は、とてもよい素材だと感じた。そこで、想像力のもととなる守り像の発想は、どうして生まれたのか。テーマを考えるにあたっての経緯を教えてください。

A：今回のテーマである府中の森の守り像の経緯については、この地域に着目して、府中という地域の自慢であり、また、一番スポットを浴びている大國魂神社という大きな神社の守り神という部分に着目し、そこから、見えない神をどのようにして形にして表現していくかという点に面白さを感じた。しかも、我々の日常に豊かさを求める視点として、制作後も、植木鉢に差して楽しめるものがよいと思った。最終的には、教室の植木鉢とか、自分の身近にユーモアが溢れることを期待していた。

Q：2年生の選択授業で、バターナイフを10時間扱いで制作した。小刀に番号を打って管理した。研ぎは業者をお願いして授業を進めたところ、男子生徒が特に熱中して制作を行った。サンドペーパーで磨きをかけて、仕上げニスで仕上げをし、授業の終わりでパンにバターを塗って食べた。苦労して作ったものへの愛着が生徒の心の中に生まれたようだった。今回の授業も、もっと時間をかけてできればよかったのではないかと。

A：大会での授業ということもあり、作品を深めて作るという点では、今回の授業は、限界があったと思う。もっとじっくり取り組めたらと考えている。

Q：完成したという達成感を求める授業もあるが、今回の授業は、刃物の使用ができるという達成感がある授業ではないだろうか。



大國魂神社



- Q : 今日の授業では最後に友達の作品を鑑賞する時間があった。しかし、文化財などは、限られた時間の中で鑑賞するには、指導者も生徒も向き合うことがむずかしいと感じているが、皆さんはどうか。
- A : 少しずつ鑑賞の時間を設定している。工業的な製品の鑑賞は自宅から持ってこさせて交流する時間を大切にしている。

〈5〉 意見・感想等

- *モノとのかかわりの中でナイフ・道具のかかわりに注目したよい授業だった。刃物を使えることによって生徒が得るものは大きいと思う。
- *1年生でバルサ材を使っている。ナイフは便利な道具だと思う。転勤して2年目、錆び付いたナイフがたくさん出てきたので、磨いて使用している。生徒にとっても人気のある道具である。しかし、日常の勤務では、研ぎをするのが難しい。途中でナイフの使用をやめて彫刻刀に切り替えたりしている。しかし、ナイフは今後も使用したい道具の一つである。

〈6〉 指導・助言

山梨県教育委員会 義務教育課 指導主事 鷹野 晃 先生

手でモノを持って、手を使いながら考えるというのは美術の授業だからこそ行なえる独特な学習方法である。授業中に生徒は考えながら、手のかげんを調節して作品を制作している。また、今日の授業で見かけた風景の一コマに、生徒が机の上に敷いた新聞紙にイメージを描いてみたり、考えをメモしたりして、それをもとに会話をしている場面があった。新しい学習指導要領の改訂を受けて、各教科においても言語活動の充実が求められるようになったが、このように生徒たちは木原先生の授業の場面で盛んに言語活動をしていた。友達と制作方法やアイデアを話していたり、少し離れた席にいる友達とさえ、こうしてモノを通しての言語活動を楽しんだりしていた。美術の時間は、生徒同士が話をしたり、自由に動いたりすることができ、それが互いの会話を生んで、言語活動の能力を育成していると評価していくべきではないかと考える。

今日の授業でも、生徒はモノを通して会話を楽しんでいて、このようにモノを通して会話を楽しむことができるのは美術の授業の特性であり、そして、美術でなければできないことではないかと考える。今日の木原先生の授業のテーマである「モノとのかかわり」ということは、モノとのかかわりながら、モノと会話することとも言える。このことが今回の授業の素晴らしい部分であり、人と人、人とモノとのかかわりがいたるところに感じられた。

小学校でも、図画工作の授業の中でカッターナイフも含めて、簡単な小刀類を使うことになっている。中学校では、小学校の図画工作の授業を踏まえて、さらに発展させる形でナイフの授業を行なっていく必要がある。今回の木原先生の授業では、最後に守り像を発泡スチロールに刺して、鑑賞を行っていた。その時も、友達の作品を鑑賞しながら、モノを中心にして盛んに会話をしている生徒の姿があった。そこでも形や色彩を通して生徒たちの会話が弾んでいて、美術の授業だからおこなえる言語活動が存在していたこと。モノを通して会話が弾む…。それが今回の木原先生の授業の素晴らしさであると受けとめている。

—— 府中のおみやげに！ 植木鉢の中からひっそり顔を出した
あなたならではの 守り像 ——

研究授業 6	授業者 国分寺市立第五中学校教諭 北澤 昭 俊		
テーマ	人間力をはぐくむ美術教育～いま、求められる創造性 豊かなかかわりを生み出す美術の授業		
	【研究の視点】	・環境とのかかわり ・主体的な主題の決定	
領域	表現	題材	自分を取りまく世界「事象と自分との距離」(2学年)

〈1〉 題材設定の理由

現在、膨大な量の情報の中で私たちは生活している。その情報のほとんどはメディアの発達により、その内容のいかに関わらず同じように簡単に得ることができる。しかし、情報としては入手できても、内容はそれぞれ自分から様々な距離をもっている。対象と自分との距離には心的、物的の両面があると考えられるが、今回は物的な距離という部分に視点を置き、抽象的な平面作品として表現することにした。それによって、普段、使用しない道具を使って自由に描くことで表現の楽しさを体験し、想像力を刺激するとともに、作品として作りあげる構成力、柔軟な視点を養うことができると考えた。

〈2〉 指導目標

- 具象的な絵画表現を避け、様々な道具で作出すマチエールの面白さを体験させる。
- 主題を意識した上で、色・マチエールで表現できるよう工夫させる。
- 自由に作られた表現の中から、トリミングすることで構成力を養う。



〈3〉 授業者自評

公開授業のテーマを試行錯誤しながら、環境というテーマをどのような方向から取り上げるかということの色々と考えた。そこで、以前行った授業の中から短時間でできる授業として本題材を組み立てた。生徒が普段なじみのないパレットナイフなどを用い、筆を使わない表現をすることで、偶然に生み出された美しさや面白さを発見して欲しかった。中学生になると写実的な表現に重きを置きたがるが、それとは異なる美の世界もあるのだということや面白さを感じ取ってもらいたかった。今回は



事前の授業ができず、初対面の授業になった。ドライヤー等を使用するので教室のブレーカーが落ちる心配もあった。最初は投げやりな様子が見受けられた生徒もいたが、制作していくうちに面白くなり積極的に制作していたようである。制作の途中でスポンジに水をつけると絵の具の糸を引かないことに気が付いた生徒がいたので、新しい発見だと言って認め励ました。楽しく授業を進めることができた。

〈4〉 質疑応答

Q：今は1時間設定での授業であり、次の授業は1週間後になる。やりにくいことが多々あると思う。今日は生徒も積極的に授業に臨んでいたのですが、これからトリミングという時になって、授業を分断されたくなかったのではないかと。このことは美術科の悩みとしてよく聞く。



今日の授業では、北澤先生がねらいとしている、生徒が絵の具を扱いながら非常にいいものを発見し高めていった姿がたくさん見られた。それで十分だと思う。トリミングをさせたい、それをもとにして感想文を書かせたい、評価し合いたいなど、授業としてやりたいことはたくさんあるかも知れないが、一番大事なことは今日のような創作の時間だったのではないかと。投げやりと思われた生徒も何か発見できたのではないかと感じた。

A：今日のこの時間の中で、導入から展開、そしてまとめまで行わなければならなかった。完結させなければならぬということも考えたが、生徒が喜んでやっていく姿を見ているうちに、自分なりの思いがにじんでくるような色遊びとか造形遊びを自分の所でやったらどうなのかも考えた。あらかじめ予想もできなかった効果もあって、投げやりだった生徒もうまくできないことが悔しいらしく別な色でやり出した。ダイナミズムとでもいうような生徒同士の刺激の仕合いもあり面白かった。

〈5〉 意見・感想等

*生徒が楽しんでやっており、いわゆる学力には反映されないように見えても、伸び伸びとやっている授業を見て、人間を育てているということを感じた。二人一組でやっていることから、ものを通して人とかかわりが深まっているようだ。

*最初、どうなるのかと思っていた。他の授業も見学し、戻って見たら教室の空気が変わっていた。生徒の表情を見ていて、制限があるにしろ、許された自由の中で表現できることをいいと思っているのだろうと感じた。新学習指導要領で全国的に選択授業がなくなり、表現する力であるとか人間関係形成力などがどうなるのか心配である。学校選択の形になると移行期間から美術は必修の時間だけとなり、表現する場が少なくなる。限られた自由の中で生徒が一生懸命制作したものはもっとアピールされていいし、校内や外部に発信して発表する機会があるとよい。つくる喜びもあるが、見て評価される喜びもある。それを美術科教員がもっとバックアップできるとよい。北多摩の先生たちが一生懸命取り組んだ美術展はもっと広い展示場所があり、行政もバックアップしてくれると、今日の発表のような取り組みがもっと活かされるのではないかと感じた。

*無理に環境と制作をつなげる必要はないのではないかと。キーワードを使うのなら、むしろ自分の心の中に一歩踏み込んだものがいい。今日は絵の具という素材だった。絵の具だからこそ塗ったり削ったりして、見えてくることもある。絵の具を通して自分の行動を具現化して自分の表現にたどり着けて、そこに発見があるから楽しかったのではないだろうか。生徒が輝ける

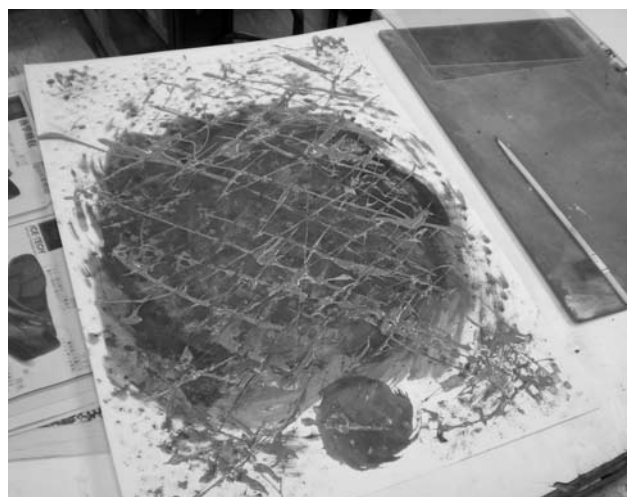


ところがあればよい。それに題材名をつければよいのではないか。

〈5〉 指導・助言

渋谷区教育委員会 指導主事 横山圭介 先生

中学校の美術でこのような授業をするということについては心配半分、うれしさ半分だった。生徒たちがしっかりと何かをしようとしており、先生が怒濤の50分授業を力強い足取りでリードし、その中心になっていた姿が印象的だった。生徒たちはやや緊張していたようだが、男女の座り方で座っていたら違っていただかも知れない。先生が今日はトリミングをすると指示したので、中心から広がりきれなかった生徒もいた。本当はもっと色々と試して遊びたかったのだろうが、仕上がりのサイズを意識したのかも知れない。環境はかかわりだ。先生は無理矢理と語っていたが、環境を活動の起点として、生徒が働きかけたらそれが生徒自身に返ってきて何かが生まれてそこに「かかわり」ができる。だから生徒同士のかかわりが最大の環境とも言える。今日の絵の具を用いた授業の活動を特に環境と結びつけなくても、東京都の中学校美術研究大会で環境とのかかわりを提案してくれることに大きな意義がある。美術の授業の環境とは環境問題ではない。小学校の授業で造形遊びを経験してきた生徒が、中学生の段階になって自分のやりたいテーマを追求しながら何ができるかという、そのような提案を中学校の研究大会でやっていただければありがたいと思っている。



◆ 指導講評

文部科学省初等中等教育局教育課程課
(国立教育政策研究所教育課程研究センター 教育課程調査官)

村上 尚徳 先生

文部科学省で教科調査官をしております村上尚徳です。

本日、授業をされました先生、並びに運営に携われた先生、ありがとうございました。

本日、お招きいただいても美術教育について語る事ができる貴重な機会がもてますことに感謝いたします。

ご承知のように昨年の3月に学習指導要領が告示され、この4月からは移行措置、平成24年度から全面实施という学習指導要領の改訂の節目にあたります。学習指導要領は、約10年に1度改訂されますが、その改訂にあたりましては、それぞれの教科でどのような指導内容が盛り込まれるのか、多くの議論があり、非常に綿密に組み立てられております。

中学校美術科は義務教育の必修教科であり、日本の中学校の子供たちが必ず受けなければならない教科であります。つまり、そこで育成される資質や能力は、将来、社会生活を営んでいく上で必要な力ということです。その力が、ただ単に絵を描いたり、ものをつくったりする力のみということであれば、何も必修教科でなくてもよいと言われてしまうことがあるわけです。そういった状況を踏まえて、美術の授業でどのような力を付けていくのかということが、美術教師に試されています。約3年間にわたり、そのような審議がなされました。

そうした中で、様々な実態調査等の資料等が参考とされるわけですが、その中で義務教育に関する意識調査というものがあります。それは、平成17年度に文部科学省が民間に委託して行った調査で、児童・生徒、保護者、教員および教育長を対象にして、約20項目について行った意識調査です。小・中学校の保護者約6,700人に対して、意識を聞いた中に「学校教育で身に付ける必要性が高い能力は何か」という質問項目がありました。その中の中学校の保護者に聞いた調査の「音楽・美術など芸術面の能力や情操」は学校教育の中で身に付ける必要性が高い能力と思うかという質問に「とても高い」と答えた割合は18.8%でした。一番高かったのは「教科の基礎的な学力」で78%という結果です。例えば「コンピュータを活用する力」



は36.1%で、それと比較しても「音楽・美術など芸術面の能力や情操」については非常に低く、「とても高い」とした割合は、実は20項目中最低でした。

我々美術の教員、あるいは美術教育に携わっている人間は、美術というのは子供たちを本来に豊かに育てていく上で、中学校教育に無くてはならないものだと思っているわけです。しかし、美術にかかわっていない多くの人達はそのように思っていない方がかなり沢山いらっしゃる。そういうことを踏まえて中教審等での議論はなされた訳です。

今回の学習指導要領の改訂では、美術で育てる資質としてどのようなことが大事なのかという点について、次のような大きく4点についての改善の要点がでました。

一つは育成する能力と内容の関係を明確にすることです。美術はやはり造形をもとに発想・想像したり、創造的な技能を高めたり、鑑賞したりする教科で、造形を基にした思考力・判断力・表現力を育てる教科です。感性も含めて、そうした能力を豊かに育てていく必要があるということです。

二つ目は、生活を美しく豊かにする造形や美術の力を実感させるということ。絵を描く、ものをつくるということも生活の中の美術ですが、それだけでなく、私たちは色や形に囲まれて生活しています。そうした時にちょっとしたものに目を向け心を留めることによって、「あ、きれいだな」「あ、いいな」という感覚が心に焼き付くことがあります。この部屋を見渡してみても、例えば、壁が木でできているとか、花が飾られているとか、様々な装飾性や建築された方のデザイン感覚が生かされていると思います。そうした点に、少し視点を向けて捉えてみる。また、外に出てみると、美術館からここまで歩いてくる途中に、本当に豊かな自然があります。そうしたところにも視点を置いてみる。そういった生活の中の造形や美術、そうしたことに気づき、豊かにとらえていく指導なども大切になってきます。

次に、鑑賞についてですが、自分なりの意味や価値を作り出す鑑賞の授業。鑑賞は作品の評価を知るという活動や、作品の背景を知ることなども必要ですが、それだけで終わるのではなく、そうした知識も学びながら、作品をよく見て、その作品が自分にとってどうであるかということ、つまり、生徒が自分自身で作品に対する価値を自らつくり出す創造活動とも言えます。このようなとらえ方で、鑑賞の授業をとらえていくことが大切だと思います。

最後は、美術文化の理解という点です。今回は、教育基本法の改正があり、その中で文化に関する教育の充実ということが示されています。美術の場合、やはり昔のものがそのまま残っていることが強みです。何百年も前の人がつくったもの、描いたものが残っているわけです。そのような作品を見ることによって、当時の人の生活や作家の人の美意識など、創造的な精神を学び取ることができる。これが美術の特色とも言えます。

そういった生活や社会の中で生きて働くような美術の力、これを育てていくためには、やはり、今回の基調提案にもありました「人とかかわる」「モノとかかわる」「環境とかかわる」

こういった視点が非常に大事だと思います。美術の学習が、教室の中だけの、狭く限られたものではなく、社会や生活とつながっているということ、また、それが実感できるような授業であることが大切だと思います。たとえ美術室内で行っていても、題材とか内容とかは外とつながっている、そういった方が分かりやすいかもしれません。

中学校の美術教育に対してあまり理解のない方の中には、小学校6年間、絵を描いたりものをつくったりしてきて、それでまたさらに中学校で3年間、描いたりつくったりしているが、同じようなことをいつまで続けるのかという意見を言う方もいます。しかし、小学校の時には小学校の時期に大切な造形に関する学習、中学校の時期には思春期のその時期に大切な造形の学習があるわけです。それだけ、美術は子供たちの精神や心の発達に密接に深く関わっている教科です。中学生の子供たちというのは、第二次性徴期とか思春期とか言われるように、小さい頃から培ってきた価値観を、もう一度、再構築していく時期に当たります。幼い頃に大人から教えられたことを一旦否定して、自分の中でもう一回解釈して揺るぎない新しい自分の価値として再構築していくということだと思います。だから、子供によっては反抗的な態度に出たり、あるいは非行的な行動に表れたりする子もいます。そういった葛藤の中で、自分をつくっていく大事な時期です。そういうときに本当にいいものや美しいものに触れて心を満たしていく、そして、自分の中でそのようなものを大事な価値として確認することができるような指導をしていく、そこが大切だと思います。その時にやはり、人とかわる、色々な人と出会って、その人たちから様々な価値を学ぶ、あるいは美術にかかわったり美術の創作活動をしている方の生き方に触れたりすることが非常に大切だと思います。同じように、「モノとかわる」「環境とかわる」ということも大事であろうと思います。

これから、新しい学習指導要領が実施されるようになり、おそらく10年間ぐらい続いていくと思います。そうした中で、私たち美術の教員は、もう一度美術の学習というものを見直し、義務教育の必修教科として全ての子供たちに「大事な学習内容である」ということを、それぞれの先生方が確認をしながら指導していただくこと。このような内容をきちんと押さえて、そうした視点に立って指導していくということが大切だと思います。

そして、子供たちがつくる喜び、見る喜びを味わう中で、社会の中で生きて働く力をしっかり身に付けていく。そういったことを、子供たち自身がしっかりと実感して一人ひとりの心に残っていく。そのような美術教育を進めていくことが、今後の美術教育の展開のためには重要なことではないかと感じています。

以上で、私の方からの講評を終わらせていただきます。

— 大会運営組織一覧 —

大会会長	中野区立中野富士見中学校長	牧井直文
都中美事務局長	中野区立中野第三中学校	吉田諭司
大会実行委員長	府中市立府中第五中学校長	中村一哉
大会副実行委員長	西東京市立ひばりが丘中学校長	大野雅生
	西東京市立柳沢中学校副校長	矢野尊久
	武蔵野市立第六中学校副校長	土橋悟
実行委員会事務局長	府中市立浅間中学校	高橋純一郎
副事務局長	府中市立府中第九中学校	蔵隆幸
局員	立川市立立川第二中学校	山本展子
	東久留米市立大門中学校	土田貢司
	立川市立立川第八中学校	玉川恵理子
	狛江市立狛江第四中学校	安島典子
	国分寺市立第四中学校	菅原賢一
	東久留米市立下里中学校	加藤順子
実行委員会研究局長	国分寺市立第一中学校	大澤晃
副研究局長	小平市立花小金井南中学校	渡辺和美
局員	国分寺市立第三中学校	松島正明
	国分寺市立第五中学校	北澤昭俊
	西東京市立田無第三中学校	小林利夫
	西東京市立保谷中学校	小山田裕子
	東大和市立第三中学校	松村正博
	東大和市立第二中学校	未至磨明弘
	武蔵村山市立第五中学校	白田統志夫
	小平市立小平第五中学校	大瀬義一
	立川市立立川第一中学校	三浦麻里
	立川市立立川第五中学校	車田幸道
	府中市立府中第三中学校	遠藤真木子
	東久留米市立東中学校	藤井義法
	武蔵野市立第四中学校	村上力
	武蔵村山市立第二中学校	棟方篤子
	昭島市立拝島中学校	鳥居浄治
	国立市立国立第三中学校	宇野庄司
	小金井市立小金井第一中学校	澁谷寿美恵

実行委員会編集局長	清瀬市立清瀬第二中学校	沢井紀子
副編集局長	西東京市立田無第四中学校	木原美恵
局員	西東京市立柳沢中学校	菊池美津子
	西東京市立ひばりが丘中学校	河本彩
	清瀬市立清瀬第三中学校	川原寛之
	東村山市立東村山第六中学校	相部公太郎
	東久留米市立久留米中学校	廣瀬正徳

実行委員会庶務局長	府中市立府中第一中学校	木場隆晃
副庶務局長	小金井市立緑中学校	土肥尚
局員	武蔵野市立第三中学校	三浦悦子
	狛江市立狛江第一中学校	石黒しおり
	調布市立神代中学校	加藤祐志
	小金井市立南中学校	本間亜希子
	府中市立府中第四中学校	延本秀樹
	府中市立府中第四中学校	上路珠美
	府中市立府中第五中学校	矢田公男
	府中市立府中第六中学校	中澤陽子
	府中市立府中第七中学校	入倉真志
	府中市立府中第八中学校	中川園子
	府中市立府中第十中学校	竹内美弥

北多摩地区中学校美術展

東南中部地区実行委員長	国分寺市立第四中学校	菅原賢一
実行委員	狛江市立狛江第一中学校	石黒しおり
北部地区実行委員長	東久留米市立大門中学校	土田貢司
実行委員	清瀬市立清瀬第二中学校	沢井紀子

第26回東京都中学校美術教育研究大会 北多摩大会
大会報告集 平成21年3月

発行者 東京都中学校美術教育研究会 会長 牧井 直文

第26回東京都中学校美術教育研究大会

大会実行委員長 中村 一哉

大会事務局長 高橋純一郎

編集責任者

大会編集局長 沢井 紀子

副編集局長 木原 美恵

印 刷

コロニー印刷

